

## 新型コロナウイルス感染症がもたらす 変化にどう対応していくか

二〇二一年二月九日、第九回宗門教学会議がオンラインにて開催されました。今回のテーマは、「新型コロナウイルス感染症がもたらす変化にどう対応していくか」です。

新型コロナウイルスの感染症拡大（以下、新型コロナ拡大）によって、社会のあり方が現在進行形で急速に変化しています。教育機関は長期にわたる休校を余儀なくされ、休校措置が解除された後も分散登校、オンライン授業などの対応策がとられています。ビジネスの世界においても、時差出勤、テレワークなど、人との接触を極力減らす行動が進められています。この、人と人とが接することを避ける生活様式、情報通信技術に大きく依存した学習形態や働き方、生活様式は、私たちの社会を、今後大きく変化させると予想されています。

新型コロナ拡大による「変化」の特徴は、「スピード」です。世界中に急速に蔓延したスピード、生活様式を変化させるスピードに、今回の感染症の特徴の一つがあり、世界中が急速な変化を受け入れざるを得なくなっています。こうした「急激で強制的な社会の変化」がどのような影響を与え、それに対してどのように応えていくべきかを考えるため、「新型コロナウイルス感染症がもたらす変化にどう対応していくか」をテーマとして開催しました。

第九回宗門教学会議では、会議委員として本願寺派司教の松尾宣昭氏、同志社大学神学部教授の小原克博氏、東京工業大学科学技術創成研究院未来の人類研究センター／リベラルアーツ研究教育院准教授の伊藤亜紗氏、勸学寮頭の徳永一道氏をお招きしました。座長は、浄土真宗本願寺派総合研究所長丘山願海、司会は、浄土真宗本願寺派総合研究所副所長の満井秀城が務めました。

なお、報告は今号を含め、二回に分けて行います。今号は有識者の先生からの提言、次号は全体討議を報告いたします。

第九回宗門教学会議開催に先立った  
開会式において、まず、石上智康総長  
より、挨拶がありました。

## 「宗門教学会議」総長あいさつ

本日は、ようこそ宗門教学会議にご参  
集くださいました。

宗門教学会議は、宗教者が持つ知見が、  
現代社会においてどのような位置にあり、  
よりよい社会の創造のためいかなる役  
割を果たし得るか、宗門の活動の方向性  
を考えていく重要な会議として位置付け  
られております。

本日のテーマは「新型コロナウイルス  
感染症がもたらす変化にどう対応してい  
くか」です。新型コロナウイルス感染症  
は、現在まですでに世界中で感染者が約  
一億人、死者は約二百万人を超え、日本  
では死者が六千人を超えるまで拡大して

おります。

「ご門主さまが『念仏者の生き方』の中  
で、「仏教はもともと仏法と呼ばれていま  
した。ここでいう法とは、この世界と私  
たち人間のありのままの真実ということ  
であり、これは時間と場所を超えた普遍  
的な真実です」とお述べになっておられ  
ます。

私たちは、縁起、無常、無我などとい  
う言葉で説き明かされている、この世界  
のありのままの真実をよりどころにして  
生きていくことの大切さを、今、新型コ  
ロナ拡大のタイミングのときだからこそ、  
あらためて確認しなければならぬので

ありましよう。

そして仏法、浄土真宗の教えに基づき、  
新型コロナウイルス感染症がもたらす変  
化への対応を模索していく必要があります。  
本日の議論が、よりよい社会の創造  
のため貢献する機縁となりますことを、  
切に願っております。

お忙しい中、ご出席いただきました松  
尾宣昭先生、小原克博先生、伊藤亜紗先  
生、さらに徳永一道勤学寮頭に深く感謝  
申し上げますとともに、本会議の重要性  
をご理解賜り、宗門の新たな未来を開く  
ために、それぞれのお立場からお知恵を  
お貸しくくださいますよう、何とぞよろし  
くお願い申し上げます。

## 発題一

## 松尾宣昭氏「新型コロナウイルス感染症が

## もたらす変化にどう対応していくか」

## はじめに

新型コロナウイルス感染症によって社会全体が大きな変革を強いられるなか、私たち僧侶に何ができるのか。宗門内における課題についてお話しさせていただきます。

## 一、一対一の関係の強化

今回の感染症によって、寺院活動のあり方がどう変化したかについては、二〇二〇年の『宗報』十一月・十二月合併号に、三種類のアンケート結果が報告されています。これを見ますと、多人数が参加する行事（年中行事・月例法座・各種研修会・葬儀・年忌法要など）は、中止・延期・縮小して実施された傾向が強

いのに対し、少人数の仏事は、それほど中止などがなされなかった傾向にあることがわかります。

例えば月参りでは、ご門徒と一緒にお経を読み、その後、向かい合ってお話をしますが、多くの場合は一対一です。二名以上と対座する場合がありますが、それでもごく少人数です。七日参りや門徒報恩講参り、家族だけの法事などにおいても同様です。こうした少人数での仏事の場合は、新型コロナウイルスの問題があっても大きな変化は起こっていないようです。感染状況が厳しい地域はまた別になるでしょうが、以上は私自身の日々の実感にも即しています。

したがって、本日の宗門教学会議の趣意書に「新型コロナウイルスによって：〈中略〉：浄土真宗の持つ『一緒性』の特徴は大きく揺らいでいます」と書かれてい

ることは、必ずしもすべての現状にあてはまるものではないと思います。この「一緒性」という言葉は、二〇一六年の『宗報』十一月・十二月合併号に掲載された「一〇年後、二〇年後の日本社会で求められる僧侶像・寺院像 答申書」の中で盛んに強調されている言葉です。それによれば「報恩講に加え、お齋・お磨き・唱和等を、僧侶・門徒の上下関係なく、同じ立場、つまり御同朋・御同行として営む点に、真宗らしい宗教文化の『一緒性』が見いだせる、と述べられています。しかし今見たように、少人数の法座については大きな変化が起こっていない地域が多いのですから、「一緒性」が危惧されているほど揺らいでいるとは言えないのではないかと思います。

ここで大切なことは、「一緒性」というのは、一緒にいる人の数とは関係がないということなのです。一対一の対話であって、「一緒性」は一〇〇％実現することができずし、逆にいくら多く人が集まっても、名ばかりの「一緒性」でしか

ない場合もあります。一対一の深い関係をつくっていけばいいわけです。今はその機会であって、当分はここに力を入れるべきだろうと思っています。月参りや少人数の法事、座談などを通して、一対一の関係、一人ひとりとの関係をつくり上げていくことが、伝道活動の本来の在り方と言えるのではないのでしょうか。

## 二、伝えにくいことを伝える役割

全日本仏教会と大和証券が、二〇二〇年八月に共同で実施したインターネット調査（「仏教に関する実態把握調査（二〇二〇年度臨時調査）」、『宗報』二〇二一年一月号）があります。その中に「今後、寺院・僧侶に求める役割」を問う項目がありました。その第一位は、「特に担うべき役割は無い」ということで、いささか意気がくじかれるのですが、続く第二位の三二・一％の方々は、「不安な人たちに寄り添う」ということを期待しております。また、第五位の「悩み相談など

の傾聴を行う」、第六位の「生活に困っている方たちの支援を行う」という活動も、広い意味での寄り添いと言えるでしょう。

ところで「寄り添う」や「傾聴する」といつても、僧侶がどのような場合でも、相手の話を無条件に受容し続けなければならぬことを意味するものではありません。もちろん教化者意識はあっても、もちろん人間的な関係性として対座するという姿勢は必須です。

しかし、相手を否定しないというのは、相手の話を何でもかんでも無条件に受け入れることとは違うのです。無条件、そうしなければならぬ場合もあります。例えば生活苦、あるいは病苦・老苦を訴えてこられる、何らかの出来事でひどく落ち込んでおられる場合などには、ひたすらお聞かせくださいと、姿勢を正し続ける必要があるでしょう。

けれども毎日の現場では、そうではない場合の方が多いのです。なかには、こちらが「えっ」と思うようなことを平気でおっしゃる方や、差別発言ではないかと思われるようなことをおっしゃる方も

### 松尾宣昭氏

#### 【略歴】

一九六二年生まれ。浄土真宗本願寺派順正寺住職、本願寺派司教、龍谷大学元教授。専門は宗乗論題における外題の研究。著書に、『仏教はなにを問題としているのか』（永田文昌堂、二〇一五）、『浄土真要鈔講読』（永田文昌堂、二〇一六）、『人間・歴史・仏教の研究』（共著、永田文昌堂、二〇一一）、『親鸞と人間』（共著、永田文昌堂、二〇〇二）、『教行信証』に問う』（共著、永田文昌堂、二〇〇一）など。

います。例えば、「どうせ死ぬのは年寄りなんだから、自粛自粛と、そんなに神経質にならんでいいじゃないか」とか「もう仏さまにコロナ終息をお祈りするしかないですね」とか。このような場合、相手の話を無条件に受け入れることが「寄り添う」ことかといえ、それは違うでしょう。こうした場合には、できるだけその場で違和感を表明する必要があります。表明しなければ、容認したのと同じになってしまうからです。

よく言われるのが「早く元通りの生活に戻れたらいいねえ」です。自然な凡情ですし、何気ない一言で他意はないことはわかるのですが、場合によってはその一言をきっかけに、考えてみたいことをお伝えすることもできるでしょう。つまり、今回のパンデミックの遠因が人類の野放図な環境破壊にあることは多くの識者が指摘しているのであって、その点からいえば、もはや「元通りの生活」に戻ることがありえない。戻ってはいけません。

確かに、こうしたことは表明しにくい場合もありますし、表明の際の言葉遣いには細心の注意が必要で、うまくいかないことも多いです。しかし、そうしたネガティブなこともご縁としながら、阿弥陀さまのみ教えに基づいた言葉を発信していく責任が、僧侶にはあるのではないのでしょうか。

### 三、オンライン法座の課題

最後に、オンラインの活用ということについてです。

私たち現場の住職が日々接しているご門徒の大半は、かなり高齢の方々です。そのほとんどは、オンラインはもとより、パソコンの操作自体ができない、あるいは苦手という方が多いのが実情です。私の経験範囲では、二軒だけ、ご法事の様子を若い人が他府県の親戚にオンライン中継するということがありました。お寺としてオンラインで何をすればいいかという点については思案中です。

例えば、オンラインで配信するとした場合でも、六十代以下の若い世代でなければオンラインで見ることがなかなかできないとすれば、まずは若い人に見てもらえるような工夫をする必要があります。そして、「見てもらえるような工夫」の前段階として、寺院のホームページなどにアクセスしてみようかという気持ちになってもらう工夫も必要となってきます。今までやってきたことを、そのまま単にオンライン中継したからといって、そもそもアクセスしてもらえないだろうという感じがあるからです。つまり、若い世代の方々に、そういう気持ちを持っていたりするためには、どう働き掛ければいいのかということから考える必要があるということです。

YouTubeなどを確認したところ、すでにさまざまな僧侶の方が、思い思いの方法で動画を配信しておられます。その中にはオンライン座談会もありました。これらの配信のほとんどは、ご門徒に向けてというよりは、不特定多数に向けて

なされています。全国規模、いや世界規模で、ご法義を求めている人々に向けられていると言えるでしょう。むしろ今後のオンライン法座は、そうした性格のものになっていかざるを得ないのかもしれない。

先ほども言及しました「一〇年後、二〇年後の社会で求められる僧侶像・寺院像 答申書」の中には、

これまでは、門徒は固定の所属寺との間で「義務的な」関係にあった。「義務教育」のように、ご法座への参拝や仏教婦人会などへの参加をはじめ、葬儀にしても法事にしても、先例通りにするのが「当たり前」であり、「そうせねばならない」としての意識があった。だが今後は、「義務」から「選択」へと寺院と門徒の関係の動機が変化する。すなわち、「この僧侶なら」「この寺院なら」というように、自身にとって価値を感じるか否かに従って、僧侶や寺院を「選ぶ」時代になるといえる。

とあります。私の経験によれば、自発的にお参りしたいという人は、例外なくご法義を聞きたくてお参りされるのです。きらびやかな法要が見たいとか、みんなでわいわい何かやりたいとかいった動機によるものではありません。きらびやかさや賑やかさを求めることは不要不急かもしれないませんが、ご法義を聞きたいという気持ちは、必要至急の場合が、確実にあ

## 発題二

### 小原克博氏「宗教とパンデミック」

#### はじめに

「宗教とパンデミック」というタイトルでお話しさせていただきました。まず、直近の出来事を通じて、パンデミックへの対応を考えると、そこから課題を抽出します。次に、私が専門とするキリスト教を中心に、歴史の中で起きたことを考えながら、直近の課題ではあるが極めて長

るものです。少なくともそういう人がおられて、ぜひ聞かせてほしいと、もし言ってこられた場合には、門徒・非門徒を問わず、対面であろうが、オンラインであろうが、電話であろうが、メールであろうが、一生懸命できる限りお取り次ぎする。これが私たち僧侶にとって常に不変の使命だと思っております。

い歴史的な課題もそこにはあることを説明させていただきます。最後に、社会のオンライン化によってどういう変化を被るのか、どのように対応していけばいいのかということをお話ししていきます。

#### 一、「共感」過剰の時代の中で ——マスクを拒否する人たち——

まず、二〇二一年一月三十一日のエ

ルサレムの様子を紹介します（東京新聞「ロックダウン中なのにマスクなしで密集」二〇二一年二月二日）。ユダヤ教のラビ（指導者）が二名立て続けに亡くなり、葬儀が行われました。イスラエルではロックダウンで基本的には外出禁止でしたが、非常に密な状況になりました。集まった人は、ウルトラオーソドックス、超正統派といわれ、自分たちの宗教的価値観で行動する強い信念を持っています。集まったほとんどの人がマスクをしていませんでした。超正統派の人たちは、イスラエルの全人口の一割程度ですが、全感染者数の三分の一を占めています。ロックダウンと言われようが、マスクをしると言われようが、自分たちのやり方である。これが感染の一つの原因になっていることが、この出来事からうかがえます。宗教と新型コロナウイルスの関係を表す一つの事例です。

次に、二〇二〇年のアメリカ大統領選挙です。コロナ対策が一つの争点になり、結果的にバイデン氏が勝利しまし

た。バイデン氏はケネディ前大統領以来、米国史上二人目のカトリックの大統領です。アメリカの大統領は圧倒的多数がプロテスタントの方です。ケネディ氏ときはカトリックの人が本当に大統領になっていいのかと大騒ぎされましたが、今回はごく一部でしか話題にならなかったことから、アメリカ社会では確かに宗教的多様性が進展していることがうかがえます。

他方で、保守派とリベラル派の対立が随所に影を落としています。今や教派の違い、場合によっては宗教の違いも越えて、社会全体を分断する構造になっています。保守派とリベラル派の対立には、定番のテーマが幾つかあります。一つは中絶問題です。中絶反対を言ってくるから彼に投票しよう。そういう人たちが一定数います。もう一つは同性婚の問題です。多様性をどう受け止めるかということが争点になってきましたし、広く考えるならば、直近にも問題になった「ブラック・ライブズ・マター」に典型

的に見られるような、人種的な多様性です。もう一つの別の対立軸としては、進化論論争、地球温暖化といった科学に対する評価です。

こうしたことと同じ列に並んだのがコロナ対策です。トランプ氏は非常に楽観的な見方をしました。「恐れることはない」というメッセージを発し、彼の支持者たちの多くはマスクをする必要を感じませんでしたが、ここから教訓を得ることができません。マスクをしない自由というものが果たしてあるかということです。アメリカ合衆国の建国の根っこには、「宗教の自由」、あるいは「良心の自由」があります。しかし、歴史的に振り返れば、人が集まるにつれ、自治をめぐり対立が起こったことで、州ごとに法律のよいなものをつくって、社会秩序を維持しなければなりません。そのためアメリカでは、「自由と秩序」を巡る対立を深く考えてきた歴史があります。

もう一つは、SNS等のコミュニケーションツールがわれわれの価値判断に及

ばす影響力の大きさです。トランプ氏陣営には、非常に強い結束力が見られました。それぞれ一人ひとりがやっていることは極めて利他的だと思っただけでなく、その利他性は自分たちの集団内部における理解であって、集団外の他者認識までは及んでいませんでした。他者認識の問題は、今回の新型コロナや大統領選挙を通して、大きく見えてきたと思います。

## 二、因果への問い

——キリスト教を手がかりとして——

ヘブライ語の聖書には、大量の人の死を招いたり、大きな危機をもたらしたものと、戦争・飢饉・疫病が繰り返して出てきます。疫病にさらされたときに、なぜ私がそんな目に遭うのかという問いが、当然出てきます。その典型的な文学の一つが、『ヨブ記』です。ヨブは、道徳的に非常に正しい人でしたが、あるとき襲われて財産を奪われ、最終的には自

らも病気になる。友人たちはヨブのところへ再三再四やって来て、「おまえがそんな目に遭ったのは、きつと悪いことをしたからに違いない」と言います。しかしヨブは、「いやいや、そんなはずはない」と答えます。こうした問答がずっと続いていきます。

これを十九世紀にライブニッツという哲学者が「神義論」という名前でテーマ化していきます。神は正しい方であるにもかかわらず、なぜこの世には悪や病や不幸があるのだろうかという問いです。

次に、『新約聖書』の「ルカによる福音書」

十三章四―五節には、「善因善果悪因悪果」という言葉でいわれるような当時の因果論が端的に表されています。地震で塔が倒れ、その下敷きになって死んだ人たちがいる。その人たちがきつと悪いことをしたから、そのようなひどい出来事に遭った、と当時の人々は考えたわけです。

こうした因果論に基づいて、人は人を裁くということをします。イエスは因果に基づいて人が人を裁くということを否

### 小原克博氏

#### 【略歴】

一九六五年生まれ。博士（神学）。同志社大学神学部教授。神学部長・神学研究科長。同志社大学良心学研究センターセンター長。専門は、キリスト教思想、宗教学、神学、一神教研究。先端医療、環境問題、性差別などをめぐる倫理的課題や、宗教と政治の関係、および、一神教に焦点を当てた文明論、戦争論に取り組む。著書に、『宗教は現代人を救えるか―仏教の視点、キリスト教の思考』（共著、平凡社、二〇二〇）、龍谷大学アジア仏教文化研究叢書『国際社会と日本仏教』（分担執筆、丸善出版、二〇二〇）、『人類の起源、宗教の誕生…ホモ・サピエンスの「信じる心」が生まれたとき』（共著、平凡社、二〇一九）など。



## 現代における宗教の課題

- ・ 宗教と災害——天罰論、過剰な道德主義への注意
- ・ 現代社会の脆弱さをコロナ禍はあぶり出した。
- ・ 自己責任論
- ・ 「同調圧力」を安全装置とする社会や教育の今後。
- ・ 感染症対策と経済活動の両立？——「成長神話」の今後

定しましたが、現実のキリスト教は、果論から自由になれませんでした。自分たちがより純粹でありたいと願うところから、汚れたものを排除しようとする

いった浄・不浄の発想も出てきます。異端審問、十字軍、ピューリタニズム、現代でいうならば原理主義的な思想ですが、実は多くの宗教の中にこういうものがあります。

現代は、かつてのような天罰論はなくなりましたが、そうしたものに関係づけるような宗教的メッセージは、時々あります。現代社会の脆弱さというものをコロナ禍があぶり出したという側面があります。

現代の言葉でいえば自己責任論のようなものが『旧約聖書』や『新約聖書』の時代にもありましたが、今の日本では、時に同調圧力というかたちで、それがあつた種の社会の安全装置としてはたらいきたという側面があります。隣の人がやっていることに合わせておけば、とりあえず文句は言われぬ。こうしたことが、教育を通じてかなり浸透しています。本当にそういったことで今後もやっていっていいのかということ、宗教の側から問いとして出すことができます。

### 三、オンライン化の進展の中で

コロナ禍以前から、科学的な価値観がわれわれの日常生活のベースとなつていきます。推測し、制御を可能とします。それによって便利で快適な社会を求めてきました。そして不条理や偶然というものができるだけ避けようとしています。京都駅から大阪のある駅まで行くときに、スマホ一つで、どこで乗り換えて、何時何分に到着するかがわかります。全部推測することができ、かつてのように、時間や待ち合わせがどうなるかを心配することがほとんどなくなってきました。

けれども、そのことによって予測可能な出来事が起こったときに、それを受け止め、変化した自分の状況を元に戻すという力がすごく弱まっています。人間は絶えず偶然にさらされており、根源的に弱い存在です。人間の弱さや相互依存性をきちんと認め合うようなカルチャーをつくっていかなければ、コロナ後も

## オンラインでの法要や礼拝

- ・身体的共同経験
  - ・自由の放棄、沈黙の共有（オンラインでは難しい）
- ・オンライン化が開く可能性
  - ・「全国の寺院におけるホームページやブログの開設率が11.1%という状況（第10回宗勢基本調査）において、宗門としてはどのようなサポートが可能でしょうか。また、オンラインが従来の「場」をどこまで補えるでしょうか。」（「第9回宗門教学会議」資料）

弱者に対して厳しい社会になりかねません。

また、教会で礼拝が中止、あるいは大きく制限される中で、普段集まるという

ことの意義が問い直されています。オンラインでは、例えば会議の途中で適当に抜けて、自分のしたいことをしながら、会議に出ているふりをするのができません。礼拝などでもやろうと思えばできますが、本当の礼拝というのは適当にできません。自由を放棄するところ、意義があるのです。

それからもう一つ、沈黙の共有です。情報社会では、絶えず言葉や情報に埋め尽くされていないと落ち着かないところがあります。宗教的な儀礼は、沈黙そのものに意味があります。これはオンラインでは代用できない部分です。

### 四、休むこと

コロナを考えるときに、聖書やキリスト教の視点から非常に大事だと思わされたのは、安息日です。日本では、絶えず働いているという勤勉さが求められ、立ち止まるということをしません。しかし、それが結果的に過労死など、社会のいろ

いろな問題を起こしています。安息日には規定があつて、強制的に休みます。ユダヤ教の場合は、金曜の夕方から土曜の夕方にかけての一日、一切の労働を断ちます。自分たちがいったい何者なのかということを考え直す重要な時間です。強制的に時間を中断しなければ、何が大事かということも忘れてしまう。キリスト教はこの考え方を引き継いでいます。

このことを議論するときには有名な、ニュートンの「創造的休暇」があります。十七世紀にペストがまん延して、大学が休校になりました。その休暇中、田舎に帰ったときに、ニュートンは、万有引力の法則をはじめとする科学史上非常に重要な着想を得たと言われています。われわれは今しっかりと立ち止まって、今までできなかったことをきちんと考え直す、あるいは休むことの重要性を考え直す。こうしたことが、日本社会にとって必要ではないかと思えます。

## 発題三

## 伊藤亜紗氏「他者にふれる手

「触覚的コミュニケーションから考える多様性と利他」

## 一、「利他学」

新型コロナウイルス感染症が拡大する中で、接触の機会を制限されるということがとても大きな問題になっていて、そのことがどのように私たちに影響を与えるかということを考えていきたいと思えます。

今日、お招きいただいたきっかけは、私が所属している東京工業大学の中に来た人類研究センターというところが、「利他」ということをテーマに研究をしていることだと思います。

一つ、象徴的な調査があります。『読売新聞』に掲載された調査（「コロナ感染は自業自得 日本は二一% 米英の一〇倍 阪大教授など調査」）ですけれども、日本人は新型コロナウイルス感染症に感染し

た原因は本人の自業自得だと思うという人が、諸外国に比べて圧倒的に多いという調査です。また、皆さんご存じのとおり、感染者に対する中傷であったり、攻撃などまったく利他的ではない行動がすごく見えてきました。

## 二、「さわる」と「ふれる」

今日は、「利他」ということを、触覚を通して考えてみたいという趣旨です。私たちが使っている日本語はとも面白くて、触覚に関する動詞が二つ存在しています。その一つは「さわる」、もう一つは「ふれる」です。英語にすると、両方とも「touch」になると思いますが、私たちはなんとなくこの二つの動詞を使い分けています。

例えば、「傷口にさわる」「傷口にふれ

る」という言い方があります。「傷口にさわる」と言われると、何か痛そうな感じがすると思います。それに対して、「傷口にふれる」と言うと、そつと接触してくれそうな感じがします。

この違いは何なのかというと、「さわる」というのはすごく一方的、接触しようとする人が主体で、その人がしたいように接触する。どちらかというと、コップとか机とか、そういう「もの」に接触するときを使う動詞が「さわる」だと思います。

それに対して「ふれる」というのは、こういうふうに接触したら、接触される人はちよつと痛いかなとか、ちよつと緊張しちゃうかなとか、接触される側の感情・状態を考えながら、接触の仕方を調整していく。そういう相互的・精神的なコミュニケーションを持っている接触が「ふれる」だと思います。

「さわる」は一方的で、物的、物体に対する接触。それに対して「ふれる」というのは人間的で、相互的な接触。そう

いうふうに整理することができますと思います。

### 三、信頼—触覚的な人間関係

私自身が触覚の問題に興味を持った一つの大きなきっかけが、視覚障害者の伴走をしたときでした。視覚障害者が長距離を走るときには、ロープを輪っかにして、晴眼者の伴走者と視覚障害者がロープの両端を持って、ずっと体の運動をシンクロさせながら走ります。ただのロープなんですけれども、ものすごい情報伝達力を持っています。例えば、走路の前方に急な坂が見えたときです。そうすると、その坂が見えているのは晴眼者だけのはずですが、視覚障害者もわかることがあるそうなんです。つまり、坂が見えることで、晴眼者がちよつと緊張を伝えるわけです。その感覚がロープを通して視覚障害者に伝達する。そういう言葉にする前の、感情とか緊張、判断ですね。そういうものがロープを通して伝達する

## 視覚障害者の伴走

「ロープを持って二人で走っていると、『共鳴』するような感覚があるのですが、お互いの調子があがってくると、はずむようなリズム感が伝わってきて、楽しい、ところが踊る感じがします」

「『伴走してあげる』とか『伴走してもらう』じゃない『一緒に走っている』という感覚」

「本当ときどきなんです、伴走者の存在を忘れて、一人で走っているような錯覚にとられるときがあります。そんなときは、目の前に走路が見えるときがあって、すごく驚くとともに幸せな気持ちになります」



ロープにはあそびが必要

### 伊藤亜紗氏

#### 【略歴】

一九七九年生まれ。東京工業大学科学技術創成研究院未来の人類研究センターリベラルアーツ研究教育院准教授。MIT客員研究員(二〇一九-三二一八)。専門は、美学、現代アート。障害を通して、人間の身体のある方を研究している。東京工業大学での「脱コロナ禍研究プロジェクト」において、ポストコロナ社会における人間のあり方と利他を研究している。著書に、『記憶する体』(春秋社、二〇一九)、『目の見えないアスリートの身体論』(潮出版社、二〇一六)、『目の見えない人は世界をどう見ているのか』(光文社、二〇一五)など。

ということが起こります。

私たちが健常者として生きているときは、どうしても視覚的な人間関係が中心ではないか。しかし、触覚的な人間関係もあって、そこには視覚的な人間関係とは全然違う関係が存在するのではないかと思うようになりました。

特にそのことを思ったのは、私がアイマスクをして、健常者の人に伴走してもらうという経験をしたときでした。最初は、まったく前が見えない状況で走ることは、信じられないくらい怖かったのですが、数分して、怖がってもしようがないと諦めたんです。そうしたら、ものすごく気持ちよかったです。その気持ちよさは何だったのかというと、伴走者を信頼する気持ちよさだったんです。本当に自分の行為、運動を人に任せるということです。触覚的な人間関係ということを考えるとき、そこには信頼がすごく重要な役割を果たしているということを見つけた経験でした。

#### 四、「伝達モード」と「生成モード」

このことをコミュニケーションという観点から分類してみます。私たちはコミュニケーションというときに、発信者と受信者がいて、発信者の側が何か言いたいことを持つていて、それを受信者に伝えるという一方的な伝達だと思いがちです。

ところが、それだけじゃないと思います。普通に食事をしているときの雑談とか、そういうときに行われているコミュニケーションは、「生成モード」といえるようなコミュニケーションではないか。発信者と受信者という役割が明確に分かれていなくて、関わりの中からメッセージが生成してくる。そういう関係ではないかと思えます。このコミュニケーションに「さわる」と「ふれる」というのは「さわる」、生成モードは「ふれる」だと思えます。

障害の世界は、どうしても伝達モード

### コミュニケーションの伝達と生成

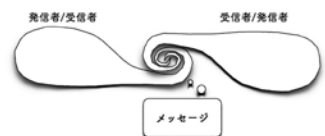
#### 伝達モード =さわる

- ・メッセージは発信者の中にある
- ・一方的
- ・役割分担が明瞭



#### 生成モード =ふれる

- ・メッセージがやりとりの中で生まれていく
- ・双方向的
- ・役割分担が不明瞭



\*クロード・シャノンのモデル (モールス信号)

的になってしまいます。晴眼者の方が正解を知っていて「ちよつと曲がってください」とか全部伝達してしまう。しかし、ロープを使った伴走というのは、本当に生成的な関係だと思えます。伴走をやっているという感覚が全然ないとおっしゃい

ます。つまり、障害を持っている方をサポートしようなどとは思っていなくて、二人で一人みたいな、その感覚がとにかく楽しくて伴走をやっているんだとおっしゃいます。そういう意味で、ものすごく生成的な関係というのがそこには成立しているわけです。

### 五、「利他的な行為」と「信頼」

先ほど、信頼という話をしました。障害に関わる場面でも、本当に信頼が足りていないというをよく感じます。信頼が足りていないから伝達モードになってしまって、「さわる」的なコミュニケーションになってしまいうというところがたくさん起こっています。

例えば、若年性認知症の当事者の方からうかがったエピソードなのですが、当事者が集まって、お弁当を食べようとすると、ふっと周りの家族が手を出してくれて、蓋を開けて、お箸を割って、「さあ、どうぞ」ということがすごく多いそ

うです。これは一見、すごく利他的な行為ですよ。ところが当事者本人からすると、自分でお弁当を持って、自分で蓋を開けたい。箸も割りたい。そう思っているわけです。それは時間がかかるかもしれないし、もしかしたら途中で失敗してしまうかもしれない。さまざまな不確実性を持っているんだけど、でも自分でやった方が、やっぱりおいしいし、自己肯定感につながると思うんですね。

また、視覚障害者の例ですが、ある方は、毎日が、はとバスツアーみたいになってしまったとおっしゃっています。「ここはコンビニですよ」、「段差ですよ」、「そこは曲がってくださいね」などと、何でも周りの人が言ってくれる。そして、言われたとおりに、伝達されるままになってしまふ。それがとてもしんどい。自分は視覚障害者をいつも演じている感じがする。そういうふうにおっしゃっています。ここでも利他的な行為が、本人の可能性をどんどん消している。

### 六、一人の中に存在する多様性

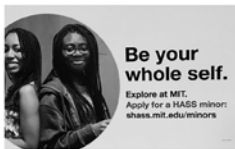
そこで考えたいのは、多様性という問題です。社会の中で、多様性が大事だということのをいわれるんですけども、それが逆効果になっている場合があるとあります。

例えば、この人は視覚障害者だから、

#### 多様性とは何か

- ・「多様性」人を固定的に見る見方につながっている？
- ・「多様性」が分断を容認する免罪符になっている??

社会のなかの多様性  
↓  
ひとりの人の中にある多様性



こういうふうにはサポートしようというふうには、その人を視覚障害者としてしか見えない。多様性が結果的に人を固定的に見るような見方につながっている場合があるのではないかと思います。それが結果的にさまざまな分断の原因になっているのではないかと。人を固定的に見てしまふ免罪符になっているのではないかと思います。

そういう意味で私は、一人の人の中に存在する多様性を大事にしたいなと思っています。例えば視覚障害者だっ、いつも視覚障害者なわけではないわけです。家に帰ったらお父さんだったり、会社に行ったら上司だったり、さまざまな顔を持つている。周囲の人が、違う面をいつも探そうとしていけば、障害ではないチャンネルで人間関係をつくることもできるわけです。そういう一人の人の中の多様性に注意すること、別の言い方をすると、自分には見えていない面がこの人には存在する。そういう意識を常に持つことが重要ではないかなと思つていま

す。

そのことと「利他」という問題も、おそらく関係しているのではないかと思つています。私たちのセンターでは、利他を「うつわ」として定義しようとしています。つまり、「利他」というのは、能動的に何かをすることではなくて、まずは自分の中にスペースを持つこと、余白を持つことが大事ではないか。そうすることで、自分が関わる相手の潜在的な可能性を引き出されたり、逆に自分が変わるようなことというのが起こるのではないかと思つています。

(総合研究所 教団総合研究室)